

## 校長室だより～和光高校OB列伝 第4号 H28.4.26

埼玉県立和光高等学校 校長 村田 達

現在埼玉県内外で和光高校出身の教員が多数活躍されている。今回紹介するOBは第9期生（昭和55年入学・58年卒業）の冨沢宏さん。大学を卒業後所沢北高校→朝霞西高校→川越工業高校と歴任しそれぞれの学校でラグビー部顧問として実績を重ねている。特に今年度も川越工業を率い現在県ベスト8まで進出。3年ぶりの関東大会出場を視野に悲願の選手権出場を目指している。



高校時代の体育祭、吉田先生を囲んで（前列右側）

和光三中出身の冨沢さんは高校進学の際に大きな決断を迫られた。野球部のエースとして中学野球界で鳴らした実績を引っ提げて都内の伝統校で「甲子園」を目指すか、既に兄上が活躍されていた和光高校ラグビー部で「花園」を目指すかの選択であった。最終的に和光ラグビー部を選んだのは吉田道行先生

の存在が全てであった。既に出来上がった体と抜群の身体能力は入学直後から強豪チームのメンバーに入り開花していく。ポジションもこの当時は1番から15番までスクラムハーフ以外はすべてこなす万能ぶりを発揮し、瞬く間にラグビーの虜となった。吉田先生が学年主任を務められたこの学年は、和光市内を中心に中学時代運動部で活躍した猛者たちが集い悲願の花園に向けて本当に過酷な練習が繰り返された。和光のグラウンドには目黒や大東一高、城北など強豪校が週末ごとに集結し、長期休業中は山中湖や八幡山（明治大学グラウンド）で全国の強豪と渡り合い常に互角以上の結果を残す。その中で冨沢さんの忘れられない思い出は、不甲斐ない試合をした本郷高校からの学校へのランニング。今となっては考えられないような厳しい練習が繰り返された。



いよいよ、花園を賭けた最後の勝負は結局準決勝で行田工業の巧みな試合コントロールの前に敗れ、吉田先生の悲願は終止符を打たれた。残念なのはこの年の春にS Oの梅津拓さんの交通事故による欠場で関東大会出場も途切れてしまったこと。チームの勢いをそがれ王者熊谷工業と反対のブロックに入ったことが勝負の綾ではあるが悔やまれる。冨沢さんは1期生からの「関東」を途切れさせた責任を背負い指導者の道を歩むことになるが、川越工業を率いて平成25年度に関東大会出場を勝ち得てこのときの雪辱を果たすことになる。

さて、大学進学に際して冨沢さんは生涯最初で最後の吉田先生の意に反する行動をとる。それは日本体育大学への進学である。既にプロップ(3番)としての資質を買われていた冨沢さんであったが対抗戦トップチームのこのポジションでは体格的な(体重の)不利は免れない。偉大な先輩である大熊さん(5期)ですらなかなか日体のレギュラーにはなれなかった。固い決意で吉田先生を説得し日本体育大学への進学が決まる。結果、努力は実り、なんと2年次からレギュラー定着、4年次には大学創部以来初めての全国大会の出場経験なく又高校ジャパンでもない主将が誕生する。教育実習に現れた時の二回りも三回りも大きくなった冨沢さんを見て私も感動した。その年に教員採用試験に奇跡の一発合格。前記のように進学校所沢北高校への赴任が決まった。昭和62年(1987年)のことである。

今でもそうだが所沢北高校は文武両道の進学校であった。だが、残念ながらラグビー部は存在しない。柔道部の顧問を一生懸命勤め、授業と生徒指導に全力を傾けることで周囲の信頼を勝ち得てラグビー部が創部される。ベスト4の壁は厚かったが、筑波大学などへラグビー部員が多数進学し、後を継いだ大学の後輩佐藤忠好さんによってトップチームの一つに成長する。2校目の朝霞西高校が山中、大倉、北尾先生など名監督に育てられ成熟したチームであったのは好対照であった。このころからレフリングにも力を注ぎトップレフラーへの道も開けていたが、脳裏には常に吉田道行先生の存在があった。生徒と一緒に



泥にまみれボールを追いかける日々こそ冨沢さんが求めている和光で学んだ精神である。私学の台頭や相変わらずの北部優勢のラグビー界だが、持ち前の不屈の根性で打倒深谷を果たし花園にその雄姿を現してもらいたい。

ラグビー部9期生と和高グラウンドで。後列左から3番目が冨沢さん。